（様式７：電子媒体）
（若手研究者海外挑戦プログラム）

令和　1年　9月　13日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長　殿

受付番号 201880063
氏　　名 吉田駿太朗
（氏名は必ず自署すること）

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名　ニューヨーク　（国名　アメリカ合衆国）

2. 研究課題名（和文）　：現代ダンス史における偶然性と反偶然性―振付方法とその歴史的背景―

3. 派遣期間：平成　30年　8月　31日　～　令和　元年　8月　30日　（　365日間）

4. 受入機関名・部局名：ニューヨーク大学(New York University)・Sience & Arts School

5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況（1/2ページ程度を目安に記入すること）

受入研究者による個人指導及び大学の講義への参加

報告者の研究領域に近い教授から定期的に個人指導を受けた。具体的には、指導前にニューヨーク近代美術館において開催されていたポスト・モダンダンスの大規模な展覧会に展示されるダンススコアを対象とし、偶然性との関わりについて調査した。そして、個人指導では、ダンス・スコアを基盤として、パフォーマンス研究の視点から振付家の作品の再現を担う役割について考察した。その上で、1990年代以降の現代ダンスにみられる領域横断性、自己の解体、そしてデジタルメディアの3つの特性がどのようにポスト・モダンダンスの偶然性及び再現と関連しているのかを議論した。また、派遣先大学の講義に参加し、1960年代の日本とアメリカのパフォーマンスについて知識を深める一方で、ゼミではエリア研究を基軸に、異なる地域の複数のテクストを読解し、大学院生と活発な議論がおこなわれた。また、実習としてシーガルセンターに赴き、ダンススコアを用いたマイケル・クリエンの理論と実践のワークショップを受け、ニューヨーク市立大学の博士課程の学生と共同してドキュメンテーション及び発表を行った。

資料調査及びフィールドワーク

受入研究者の紹介でニューヨーク公共図書館舞台芸術部門を訪問し、長期間に渡ってアンナ・ハルプリンの映像資料及び文献資料の調査することができた。また、前述したニューヨーク近代美術館でのイベントの参与観察及び舞踏家オオタケ・エイコへのインタビュー調査を行った。その結果、博士論文を執筆する上で重要な一次資料を入手することができた。加えて、パリの郊外で行われたポスト・モダンダンスの系譜にあるジェローム・ベルの振付作品の参加者へのインタビューを行うことで同様に一次資料を得ることができた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

研究成果発表等の見通し

派遣先大学での研究成果の一部は既に、モントリオールの国際演劇学会において口頭発表を行うとともにカルガリーで開催されたパフォーマンス研究の国際学会で口頭発表及びワークショップを行い、その独創的な視点について高い評価を得ることができた。また、派遣先大学の学部生、大学院生を対象とした講義形式での口頭発表を二回に分けて行い、自身の研究に対する質の高いフィードバックを学生たちから得ることができた。これらの研究成果を基盤として、2019 年度には舞踊学会で口頭発表を行うとともに、2020 年度に海外の学術雑誌 Theater Dramatic Research に投稿する。平行して、今回のリサーチで収集した資料を利用し、博士論文の一部を執筆し、2020 年に博士論文を提出する。その後に博士論文の出版・刊行を行う予定である。

今後の研究の方向性

今後の研究の方向性は、本プログラムの主な調査対象であったポスト・モダンダンスの振付家及びアメリカ在住の舞踏家だけでなく、ダンススコアを用いる振付家マイケル・クリエンやジェニファー・モンソンの多角的な振付実践を加え、現代の振付たちが探求する観客及び環境に関わる振付方法の拡張について分析していく計画である。つまり、これまで現代ダンスにみられる振付方法の変遷の中で、偶然性及び反偶然性について哲学的な側面で考察してきたが、彼らのリサーチベースの振付実践である“Parliament”や“iLanding”といった事例を扱うことで、偶然性及び反偶然性に関わる振付が、社会／政治の側面及び環境の側面で振付の生態系をどのように構築しているのかを考察し、明らかにする。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

本プログラムにおいて、ニューヨーク大学アーツ＆サイエンス校東アジア研究科でのセミナー、パフォーマンス学部舞踊学科での振付の実践及び理論のセミナー、ニューヨーク市立大学のパフォーマンス学科でのセミナーに参加することができた。これらのセミナーを通じて、振付の研究者や実践者、大学院生との多数のプロジェクトに関わることができた。特に、ニューヨーク市立大学の博士課程のコロンビア出身の学生とともに振付方法の探求として共同研究を開始することができたのは、幸運であった。この共同研究は現在においても継続中であり、今後の研究を大きく前進させるものであると同時に、アメリカ、日本、コロンビアの中で、文化を横断した研究への取り組みを可能にさせるものであると考えられる。

また、滞在期間中にアメリカ及びカナダの複数の学会に参加し、発表する機会を得ることができた。舞踊研究者だけでなく、パフォーマンス研究や演劇研究の分野の世界中から集まってくる研究者と対等に議論することができたのは大変に有意義であった。加えて、シカゴにおいて開催された国際舞踊学会において Graduate Travel Award を獲得したことも自信に繋がる出来事でした。この国際学会への参加の中で、同分野の舞踊研究者と出会い、最新の研究動向を知ることができたといえる。さらに、Perfromance Studeis international の開催するサマースクールにおいては、同世代の大学院生が参加し、長い時間をともにしながら、議論を深め、互いの研究への理解を深めることができた。

人脈の構築という点では、アメリカ人振付家のジェニファー・モンソン氏との出会いが挙げられるだろう。彼女は、ダンサー、科学者、芸術家の集団を結び付けてきた実績があり、専門領域以外に及ぶ彼女の知見に触れることができた。また、彼女の著書である“a Field Guide to iLanding: scores for researching urban ecologies” はダンススコアについて記述しており、本研究の主題である偶然性の振付に関して視野を広げることができた。このような、振付家の交流以外にもニューヨーク大学東アジア研究科の学生、研究者と交流を持てたことは、非常に有意義であり、これらの関係性を維持しつつ、今後の博士課程以降の研究に活かしていきたいと考えている。

最後に、振付実践の観点からニューヨークの Performing Arts Festival や River To River Festival といった今まで日本では知り得ることのなかった数多くの振付作品の関わるイベントを知ることができたのは、今後の研究の糧となるものであるといえる。